玉子王子　著

１章　華奢な女性でも護身術を習っていれば暴漢の金ちゃんを破壊して勝利できる

路地裏に数人の男。
いわゆるオタク系の見た目の青年。
それに不良が絡んでいた。
適当に言いがかりを付け、金を取ってついでに殴ろうという話。
繁華街である。
街行く人々は黙って通り過ぎるか、被害者を笑うものすらいた。
――格闘技でもやってれば……いや、俺みたいな体も小さい奴じゃ無理か……
仕方なく財布を出す。
「待ちなさいよ！」

女の声。

振り返ると、小柄というより小太りの青年坂松よりさらに小さい女性が立っていた。

「さっきから見てたけど、ただの因縁でしょ！」

「なんだと！？」

「いや待てよ、ラッキーじゃん。結構乳でかいし」

不良というかチンピラか。

四人ほどもいる。好色そうな目で小柄な巨乳女性を見下ろしてニタニタ笑っていた。

それが、坂松に振り返る。

「お前、もういっていいぜ」

一瞬喜ばなかったかといえば嘘になる。

しかし、さっさと逃げることは出来なかった。

――俺がいても何も出来ないし、女がやられてたら周りの奴らも流石に助けるだろう。なら、俺が踏みとどまって殴られたりするのは損だ。ここでどうにかしようとしても、どうせこの女だって俺にやらせてくれるわけでもない。

二十の大学生で、童貞の坂松幸太郎。

――こういう考え方だから女にもてない、なんていう奴もいるかもしれないがそれは違う。見た目がよければ俺だっていい顔ぐらいするさ。かっこつける意味ないからつけないんだよ。だから、この女も放って行くのが正しい。

思う。

が、動けない。

眉を顰める坂松。

彼がいかない事に、ニタニタしていたチンピラたちがムッとするのがわかる。

「お前、やっぱり殴られたいのか？」

「に、逃げろ！」

叫び、チンピラの一人にぶち当たる。

油断していたのか、あっさりしりもちをつく男。

「あ、このオタク野郎！」

「ぶっこ……おぐあああああああああああ！」

いきなりの絶叫に飛び上がる坂松。

チンピラの一人が転がっていた。股間を押さえて。

「気に入ったよお兄さん」

　その前で、軽く片手を握って立っている巨乳娘。

「こんな一人じゃ何も出来ない連中より、よっぽど根性ある」

　振り返り、歯を見せる。

「おぐおおおおおおおお、き、キ〇タマあっあっあっあっ」

　涎と涙を流し、口をガクガクと震わせるチンピラ。自分の手で睾丸を押し潰しかねないと思えるほど全力でそこを押さえる。

　その姿に、噴き出す小柄巨乳。

「ぎゃははは！　キ〇タマ付いてたんだ？　クソ野郎だから付いてないと思ったよ」

「こ、この女！　女だからってゆるさねえぞ！」

「チ〇ポ小さそうなチンピラども、ここまでおいで！」

　笑いながら逃げる。

　追うチンピラ三人。

　坂松に突き飛ばされた男も立ち上がっていた。

　倒れた一人は転がる。

　汗を噴出させ、股間を押さえてまるまる。

「い、いいいいいいい」

　ガクガク痙攣する。

　泡を吹いていた。

　どう見ても先ほどより状態が悪い。

　ただ打撃を受けただけなら時間が経てば痛みが引くだろうが、組織が破壊されたなら、時間が経てばそこから痛みが余計広がるだろう。

　もぞもぞと、ズボンに手を入れて股間を探るチンピラ。

　チンピラは、その手にあるべきものが触れないのに気づく。

「あ、あ、あ……き、キ〇タマがあああああ」

　片金潰れていた。

　ナノテクノロジーが発達し、コンビニで売っている薬一つで睾丸の一つ二つ十秒で再生する世界である。

　しかし、男にとって「睾丸が潰れる」というのはそういう「後腐れ一切なし」という条件を超越した恐怖と苦痛と絶望だった。

「あああああああああああ嫌だ、嫌だああ……玉……たまあああああ」

　股間から全身に広がる痛みでのたうつチンピラ。

　それを、通行人たちが囲む。

　というか、女たちが。

　心配して顔を見合わせる。

　などということはまったくしない。

　皆笑顔。

「あらあ、もしかしてあなた、タマタマが？」

「やだ、キ〇タマ潰れてるの？」

「ぷぷ、あんな握り拳でちょこっと殴っただけでキ〇タマって潰れるんだ？　受けるわ！」

「えらそうなチンピラさんがねえ。痛い？　痛い？　金のタマタマ痛い？」

　ニヤニヤと、どう見ても**性的に興奮した顔**で**金的嘲笑**を食らわす女たち。

　頬を引きつらせる坂松。

　――な、なんだこの女……

　ここはうさぎ県のうさぎ市。

いわゆるドＳ女性の割合が世界で一番高いといわれる土地だ。

それでも、運良くそういう女性に遭遇せずに済んでいる人間も相当数いる。

坂松はそういう男だった。

転がっているチンピラも。

睾丸破裂の痛みで震えているが、その上恐怖でも震えだす、悲惨というしかない。

「ひ、ひいいいいい、なんだこの女ども……」

「あら、女どもだって」

「女性蔑視ってこと？」

「これは許せないんじゃないかしら？　チンピラの癖にねえ」

「な、なんだと……お前ら女だからって手を出さないと思ってんじゃねえだろうな？　仲間が戻ってきたらお前らも浚ってレイプしてやる……え、ちょ」

怒られるような事を言ったチンピラ。

だが、女たちは怒るどころか彼の台詞を聞くと、満面の笑みを浮かべる。

「こいつ面白いこと言ったわ！」

「キ〇タマ潰れてまともに動けないくせにね！」

「っていうか、レイプしてくれるんだってさ！」

「この感じだと片金だけよ！　潰し慣れてるからわかるの！　ただの打撃ならダメージが重過ぎるし、両玉ならもう喋れないからね、ってわけで消去法で片金！　片金消去された状態！」

――ちょ、マジか？！　キ〇タマ潰し慣れてるんだ？！

キュウウ、と急所が縮み上がる坂松。

女たちから離れる。

と、先ほど走っていたチンピラたちのほうに近付く。

そちらでは喧嘩が続いていた。

加勢しようとそちらに近付く。

残されたチンピラ一人に女十人近くが群がる。

片金が潰れて動けないチンピラに、レイプすると脅された女たちが牙を剥く。

……という設定だが、女たちはそれらしい反撃の理由になる「暴言」を引き出そうとしていた節もあった。

が、最早どうでもいいことだった。

しゃがんで、女たちが次々と手をチンピラに伸ばす。

「おら、大人しくしな！」

「ちょ、やめ……あああ！」

腕を引っ張られ、万歳の形にされる。そしてズボンがガチャガチャと女の指で音を立てる。

顔を真っ赤にするチンピラ。

「ちょ、ま」

「レイパーのご自慢チ〇ポ見てあげましょうよ！」

「片金潰れてるんなら、痛みで多少縮んでるでしょうね！」

「それは割り引いてあげるから安心して！」

ズボンが下ろされる。パンツの膨らみを見て女たちが目配せしあう。

「あらあらあ、なんか、ここ凄く膨らんでるわ」

「本当ねえ。何か隠してるの？」

「デッカイ肉の巨大バット？」

「や、やめてくれ……俺が悪かった！」

「うるさいわね！　大人しくしなさい！」

パン、と女の一人が横から男の頬を平手打ちする。

「あうっ」

「あうっだって！」

頬を叩かれて、反射で涙が滲む。それを見た女たちが手を叩く。

「見て、ほら！」

「ビンタ一発で泣きそう！」

「女の子にいじめられて泣くチンピラ！」

「な、泣いてない……ああ！」

「それじゃそろそろパンツ脱がせましょうか！」

「そら！　あらあ！」

「やだ、チンチ〇小指みたい！」

「ぎゃはははははは！　片金潰れて縮んでることを度外視しても超クッソ短小！」

「まあエッチは十分に可能な大きさよ。健康なサイズ。健康な範囲で最小サイズ」

「写真とって皆に流してあげるわ！」

「っていうかこいつの携帯で、知り合い全員に「俺様の巨根を見ろ！」ってメール送っておくわね！」

「やめて！　やめてください！　はひっ！」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパン、と平手打ち。

「そらそら！　頼める立場かコラ！」

坂松が絡まれているときに割り込んできてこういうことをしてくれれば助かったと思うが、そういうのはドＳ女子の行動パターンではないのだろう。

短小をしっかり写真に収められ、メールを送られた後、チンピラは女の誰かが持っていた薬で片金を再生される。

そして、改めて「レイプ魔への制裁」ということで金潰しを食らっていた。

寄ってたかって押さえ込まれ、両足を広げられるだけ広げられて、数人の足を股間にあてがわれる。

そして容赦のない金踏み潰し。

「ぎゃあああああああああ！」

泡を吹き、痙攣する。叫びつつ歯も食いしばるという狂乱。ガチガチと歯をかみ合わせる。

正気を失いかねないほどの苦痛に苛まれているのは見ればわかりそうだが、女たちは平気というか、むしろ楽しそうだった。

「そらそらそら！　キ〇タマ潰れろ！」

「っていうか、もう潰れてるし！」

「キ〇タマって踏み潰すのは簡単よね！」

「腰骨に押し付けるのが玉潰しのコツだからね！」

　本当に慣れているらしい事を、世間話のように楽しげに話す女たち。

　チンピラが金責めリンチを受けるのと、時間的に前後して小柄巨乳対チンピラ三人の喧嘩が起こっていた。

　後に金責めリンチを食らうチンピラに握った拳を振って小指側を叩き込む、鉄槌を食らわした小柄巨乳、細地ミチネはチンピラ三人を引き連れて走る。

　ガードレールを飛び越えて道側に出る。

　酔っ払いが多い繁華街なので、車は徐行してくれる。そもそも危ないのでタクシーぐらいしか走っていない。

　だからまあある程度見ていれば大丈夫と言えば大丈夫な振る舞い。

　ミチネを追ってチンピラもガードレールを飛び越える。

「ボロボロに犯してやるからよ！」

　と、急に振り返るミチネ。

　そしてチンピラの上半身を押す。女の力だ、ちょっと足を引いてバランスを取れば押し返し、腕を掴むことも出来るだろう。

　足を引くのは簡単だ、後ろにガードレールがなければ。

「おああああああああ！」

　バランスを取れず、簡単にガードレールの向こう側、歩道のほうに押し戻されて頭から落ちるチンピラ。

「ぐあああああ、こ、この……」

　バタバタと足を宙で振るうチンピラ。

　頭を打ったせいで多少目が回っている。

　ガードレールの上に寝るというか、逆Ｖ字になってまともに動けない状態だ。

　すぐに動ける状態ではない。

　それでも、腕で頭の側に体を引っ張っていけばガードレールから腰がはずれ、足がはずれ、下りられるだろう。

　が、その前にミチネが近付く。

　動きも鈍った足の間に入り、両手を握って振り上げる。

「え、あ、ちょ……おぐあああああああああ！」

　絶叫するチンピラ。

　歓喜の表情で拳をゴチャゴチャとチンピラの絶対急所に振り下ろすミチネ。

「キ〇タマキ〇タマキ〇タマキ〇タマ！」

　逆Ｖ字の頂点である股間に向けて鉄槌を振り下ろしまくる。

「キ〇タマ潰れろキ〇タマ潰れろキ〇タマ潰れろキ〇タマ潰れろキ〇タマ潰れろキ〇タマ潰れろ」

「はぎあいあああああああああああああああああああああああああああああああ！」

文字通りの滅多打ち。もちろん仲間は人生最高ぐらいの必死さで助けに駆け寄る。男として、そうせずにはいられなかった。

「や、やめろおおお！」

しかし、間に合わない。

ほんの数秒の間に、チンピラの男としての人生が終わる。

「ほんぐうううううううううううう」

「きゃはは！　もういいよ、両玉潰れたっぽいし！」

泡を吹き、白目を剥いたチンピラをガードレールに乗せたまま離れるミチネ。

真っ青で仲間に駆け寄るチンピラ。

揺さぶっても、何の反応もない仲間に愕然とする。

それを見て、ミチネが楽しそうに笑う。

「あらあら？　まさかタマタマ潰れた人見るの始めて？　股間に二個もぶら下げてるキ〇タマの専門家とは思えないわね」

――意味がわからない。キ〇タマ付いてることと、潰れた奴を見たことがあることは関係ないだろう。というか、この女も潰れた奴を見るのに慣れてるのか……

金責めリンチを見かねて、もしくはミチネを助けようと追ってきた坂松は少し距離を置いたところで青ざめていた。

見物人は大勢いるが、男たちは一様にこころなしか膝を締めて青ざめている。

一方、女たちは興奮気味だ。

「いいぞ！　キ〇タマ潰してやりな！」

「犯すとか何とか、頭おかしいこといってたからね！」

「なんななら私たちもキ〇タマ潰しに参加しようか！」

「な、ひ……」

残り二人のチンピラが震える。

金潰しなど、普通ならできるわけがないと思うだろう。

それでも男としては言われたくもない話だ。

しかし今、仲間が目の前で股間を殴りまくられ、瞬く間に**両玉粉砕**で男としての生殖能力を永久に奪われたのだ。

まあ、薬で治せばすぐ元通りだが、ナノテクが発達する前ならお終いだったわけだ。

その場合は、ミチネも軽々二個玉潰しなど狙わないだろうが。

だが、今は治るのだ。

なら、**潰していいや**と、自分はぶら下げていない側のミチネや、周りで熱狂している女たちは思うのだった。

――ひいい、なんだこの女たちは。

金責めリンチを避けてこちらに来たつもりの坂松。

しかしあまり避けた事になっていないかもしれないと思い始めていた。

歩道側に戻るミチネ。

震えながらも、ここで引いたら二度とこの界隈で大きな顔が出来ないと思ったか、チンピラ二人が距離を詰める。

と、一人に踏み込むミチネ。

パン、と顔に手の後ろのところを叩きつける。バラ手というか、目打ちというか。

「ぐっ！」

一瞬視界を奪われるチンピラ。と、両手で股間を押さえる。

ゴチャ、とその手をミチネの膝が押し潰す。

「うぐっ！　や、やめ……そこは……」

手の上からでも、衝撃が急所に伝わる。戦意をガリガリ削れるだけのダメージはあった。

そこに、二度三度と膝蹴りを叩き込むミチネ。爪先立ちになり、舌を突き出すチンピラ。汗が噴出し、全身が震える。何とかしなければならない。だが手を動かせばそれこそ去勢だ。

ゴチャゴチャゴチャと膝蹴りを繰り返すミチネ。

しつつ、手を振り上げる。

バン、と驚くような音を立てた平手打ちが頬に炸裂する。

「ぐあああああ！」

思わず片手で顔を抑えてしまうチンピラ。そうなると、今度は本命の膝蹴りが片手しか守っていない股間に減り込む。

「はぐうううううう！」

「うわあああ！　やめろ！」

もう一人が掴みかかってくる。

ミチネの目打ち。

仰け反ってかわすチンピラ。

膝蹴りに沈んだ三人目といい、結構いい動きをする。

さらに、体格はミチネより遙かにいい。

それなのに、決して武術の達人という感じでもないミチネがそれを圧倒する。

――どういうことだ？　難しいコンビネーションもないし、多彩な蹴りを使うでもない、変な構えもしない、武器も使わない。なのになんで、体格があんなにいい四人を倒せる？

目打ちをかわしたチンピラだが、体勢を崩したところを体当たりを食らう。

ガードレールに押し倒したときといい、それも彼女の得意技の一つのようだ。

自分で後ろに下がる形だったチンピラは溜まらず道に転がる。

と、ジャンプするミチネ。

着地するのは、四人目のチンピラの上。狙う場所はもう分かりきった話だが、男の急所の上だった。

グチ、と女の靴の下で二個の弾力ある肉のボールが潰れる。ある程度の強度はあるものだが、大人の女の体重を乗せられては持たない。

「はぐあああああああああああああああああああああああああああああ！」

白目を剥き、絶叫するチンピラ。

周りの女たちが手を叩き、歓声を上げる。

「あ、これは潰れたわね！」

「去勢絶叫はいつ聞いても濡れる！」

「女の全体重対キ〇タマ！　好カードだわ！」

「去勢完了ね」

「まだまだ……レイプするとか言い出す奴には、何度も何度も、玉再生と玉潰しで可愛がりしかないでしょうが？」

「とりあえず、ズボン脱がして脱がして」

「さっきの連中もね」

「やだ、超短小！」

「これは同情しちゃうわね！」

「でも去勢する！」

　戦闘力を失った男たちに、瞬く間に群がる野次馬のドＳ女子たち。

　涙と鼻水を噴出し、必死で哀願するチンピラたち。

「すいませんすいません！　キ〇タマだけは許してください！」

「うるさいわね！」

「おぐあああああああああああ！」

　三人目は、金蹴りで倒されたものの、片金も潰れていなかった。片手でガードしていたおかげといえるだろう。

　だが動けないところを女たちに押さえ込まれ、数人掛かりで鉄槌の嵐。股間を餅つきの臼のようにされて睾丸を餅のごとく叩かれまくって悶絶する。

　そこでズボンを引き摺り下ろされる。

　四人目ももう脱がされていた。

「やだ、極小！　なにをとはかわいそうだからいえないけど！　おチンチ〇だとはいえないけど！　おチンチ〇が極小だとはいえないけど！　っていうか皆さん、この四人のおチンチ〇は極小ですよ！」

「言いまくってるじゃない！」

「うわ、マジで四人ともチンチ〇小さいんですけど！」

「とりあえず、携帯パクって友人に短小チ〇ポ写真を送りましょう！」

「巨根王、その名も俺、と」

「やめてえええええええええ！　おぎゃあああああああ！」

　四人が一箇所に集められ、いつの間にか集まっていた二百人以上はいそうな女たちに、睾丸を潰されては再生されることを繰り返されていた。

「レイパーはこういう目にあって当然よね！」

「っていうかこいつら最近デカイ顔してたしね！」

「チ〇ポが小さいからバランス取れてると思ってたんじゃない？」

「こういう連中には、**大事な金の玉**に勘違いを思い知らせるしかないわね」

　――なんなんだよこの女たちは……どこから沸いたんだ。そして何でこんなことを……徐々にエスカレートして……とかそういうんじゃなくて、始めから全員が「この完成形」に向けて動いてるぞ。どういう**カルト宗教のメンバー**なんだこいつらは？

　別に何の宗教にも参加していない女たちである。

　ただ、「悪い男」に対しては「こういうことをしていい」「するべき」「**したら楽しい**」などと考える文化を持っているということだ。

　なぜそんなものが形成されたのかはいくつかの要因があるだろう。

　一番大きいのは、うさぎ県には元々ドＳ女性が多かったということ。

　そして金責め格闘を見せる地下闘技場があって同好の士が集まってその傾向をお互いに強めているということ。

　その闘技場で同好の士が一緒に玉潰しイベントに参加したりすることが多くある、ということではないだろうか。

　ようは、その特別な空間で行われていたある種の祭りが、外でも横滑りで行われている、というよ

うな感じだ。

まあ、それらは要因の一つに過ぎないだろう。

こういう異常な文化が形成されるには、いろいろ複雑な理由があるに違いない。

が、四人のチンピラにはそんな事はどうでもいいだろう。

絶叫し、泡を吹き、睾丸が潰れたことで気絶して、もう一度潰されて覚醒、一瞬後また気絶、というような地獄の時間を過ごしていた。

目をそらす坂松。

彼らの現状とこれからしばらく続くだろう地獄については考えず、とりあえず助かった事にほっとして立ち去ろうとする坂松。

――そうだよ、終わればキ〇タマは再生され、何もなかったも同然。どうせ女確保してるんだ、解放されたらその足でセックスしに行けばいいじゃん。全然問題なし。

キュンキュンに縮み上がった股間が坂松の考えが上っ面だけだということを示していた。

その肩を、ミチネが叩く。

「ありがとうね」

「え、いや、それは俺が……」

「もういっていい、っていわれたのに、逃げなかったじゃない。あんな金無し連中よりずっと勇気あるよ」

――金無しって……

ほんの少し前まで殺してやりたいと思っていた。

だが今は違う。

――ああ、あんな風にキ〇タマ握り潰されて……ひでえよ。同じ男として、もう同情以外ない。だってあいつらだって、俺の玉を潰す気はなかった。同じ男同士だもんな。それに比べて女は……

特に、目の前の巨乳の恐ろしさは体格では測れない。いや、力も技もなくとも、急所を狙ってくればそれだけでナイフを持った人間より下手をすれば恐ろしいかもしれない。

ナイフで刺されるのは、誤解を恐れずにいえばちょっとかっこいいかもしれない。ヒーローがそういう目に合うのは絵になるかもしれない。

だが股間を蹴られて「おごおおおおお！」などと絶叫するヒーローがいるだろうか。

金的を食らうのはとことんかっこ悪くて惨めという気がする。

というか、押さえ込まれて連続金潰しというのは「金的」の範疇に留まるのか微妙だが。

「私うさぎ大学に通ってる細地美知音って言うんだけど」

「あ、俺もうさ大生なんだ。坂松幸太郎」

握手する。

驚くほど小さく柔らかい手だ。

「凶暴な女だって思わないでね？　護身術やってるだけなんだ」

「護身術……」

――そうか。派手な蹴りも何もなしでキ〇タマ狙っていく感じは、確かにそんな感じだな。まあキ〇タマ狙っていく技ってのはちょっと引っかかるから俺がやるってのはアレだが……

手を握る。

柔らかい手。

余所の女の手を握るのはいつ以来だろう。

もしかしたら、そんな事はしたことがないかもしれない。

――可愛い子だよな。俺を助けてくれたし……

同じ大学だという。

こんな子と付き合えたら、と思うが、無理だろうとも思う。

――見た目もよくないし。口下手だし。漫画やアニメが好きってオタクだからな、とても女に好かれるわけない。

ただ、これを機会に友人ぐらいにならなれるかもしれない。

――見ず知らずの俺を助けてくれる子だ、「オタクの友達なんか要らない」なんていわないだろう。

そんなことを思いつつ、無料通話アプリのアドレスを交換する。

流石にそれで「もう友人」だなどとは思わないが、一歩前進とは思う坂松。

体験版終わり

この後坂松、淡い恋心に引きずられて

金責め護身術教室に唯一の男性インストラクターとして乗り込み、案の定金潰し。

それに懲りても、ボランティア護身術教室でまたも玉潰し。

さらにそこから全裸で逃げ出し、露出狂と間違われて終わりなき去勢リンチに……

続きは製品版でお楽しみください。